

はじめに

昨年の「はじめに」は多忙化について書いた。正直なところ、もう1年経ったのかというのが実感である。学内外行政、教育が多忙化の内容であり、その分が研究にしわ寄せされている。とはいえ、研究でもいろいろな企画が持ち込まれ、それらにも対応を迫られているからマルチタレント化はするが、地中深く掘り下げるボーリング作業は手薄になりかねない。この辺が多くの研究者の悩みであろう。

さて、本学のスポーツ科学はスポーツ社会学（社会学研究科）とスポーツ産業論（商学研究科）の2領域から構成されている。後者の主柱であった早川武彦教授が2006年3月末をもって定年退職された。我々後輩への激励としても『グローバル化するスポーツとメディア、ビジネス』（創文企画、2006.2）を上梓された。そしてそれに返礼するように、本研究室の一環としての研究会を基礎に『越境するスポーツ：グローバリゼーションとローカリティ』（創文企画、2006.2）が高津勝、尾崎正峰両教授編著で出版された。多忙中にあっても、焦点を明確にし、日常的に地道な努力をすれば、こうした成果が生まれるという何よりの見本であり、本研究室の誇りでもある。

昨年度から今年度に掛けて学内の研究年報、一橋論叢の編集体制が変わり、後者は従来よりもより商業化されたものに、そして前者は各研究科を中心に、大学院生の執筆も可能となり、研究科紀要となった。本年報も総合図書館の雑誌デジタル化の中に入れられ、昨年度からISSN1880-3814も取得して、より公認された雑誌となりつつある。

さて、多忙化の中で、只それを嘆いているだけで研究は進まない。もちろん多忙化の緩和のための諸行動をしながらも、一方では冷静に、蓄積をする研究スタイルが今まで以上に求められている。

私的経験で申し訳ないが、かつて大学院生の頃、講義参加、アルバイト等々に追われ自分の研究が進まなかった。勧められて1週間の勉強時間を毎日手帳に付けて見たことがある。その勉強時間とは講義参加以外に「自主的に」机の前に座った時間である。経験的に言えば、週30時間（1日平均4時間）を超えるとどうにか勉強したように感じ、25時間を切る（1日3.5時間）と多忙感ばかりしか残らなかった。最近それを再度行ってみた。子育ても終了したから、土日は稼ぎ時で、カミさんの機嫌が良ければどうにか時間は保てそうだが、長時間は無理が利かないという加齢疲労を強く自覚させられることになった。良かったのか悪かったのか、ともあれ研究時間確保を意識した1ヶ月であった。

スポーツの急速なグローバル化とローカル化に伴って、スポーツ研究もこれまで以上に広くかつ深く追究する事が求められている。狭い領域に留まっているだけではなく、広く交流しながら、一方で深さも求められる。ここ数年で構成員の大きく変わる本研究室もまた、一方では新たな方向を模索する必要があるだろう。それは広く学内外と交流し、教訓を得ながら進むしかないであろう。読者の方々にもご支援と交流をお願いする次第である。

2006年9月

一橋大学スポーツ科学研究室室長 内海和雄